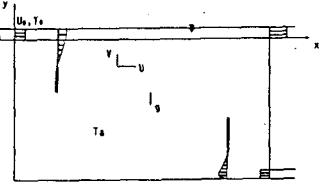


Wall jetの解析法に関する2, 3の検討

京都大学工学部 正員 岩佐 義朗
水资源開発公團 正員 伊藤 邦展

広島大学工学部 正員 細田 尚
京都大学大学院 学生員○坂井 伸一

1. はじめに；表層密度噴流を室内実験で再現する際、定常状態を保つためには連続性により失われる周囲流体を補うために下層部への補給水の供給が必不可少となる。本研究では、その補給水の運動と密度差の小さな壁面噴流と³⁾を取扱い、(Fig.1 参照) 乱れ Reynolds 数 (Re_f) の低い領域上含む乱流モデルを適用し、Re_fが無限大の標準的乱流モデルとの違いを明確にする。その際、壁面での境界条件を取扱い、wall function 法の適用可能な場合と不可能な場合に分けて考究し、標準的乱流モデルより広範囲な流れの解析が可能になる。



2. 基礎式系と壁面境界条件の取扱い；Re_fが低い領域を考慮した E 王子モデルと密度差のない鉛直二次元 wall jet の適用を行ふ。基礎式は密度噴流への拡張を帶びた次式とする。²⁾ 但し本研究では flux Richardson 数 Rf, f_{\infty} u C_{E2} O である。

$$\frac{\partial U}{\partial X} + \frac{\partial V}{\partial Y} = 0$$

$$\frac{\partial^2 U}{\partial X^2} + U \frac{\partial^2 U}{\partial X \partial Y} + V \frac{\partial^2 U}{\partial Y^2} = - \frac{1}{\rho} \frac{\partial P}{\partial X} + \frac{1}{\rho} \left(- \bar{U}^2 + \bar{V}^2 \right) + \frac{1}{\rho} \left(- \bar{U} \bar{V} \right) + 2V \left(\frac{\partial U}{\partial Y} + \frac{\partial^2 U}{\partial Y^2} \right)$$

$$0 = - \frac{1}{\rho} \frac{\partial P}{\partial Y} - g$$

$$\frac{\partial^2 U}{\partial X^2} + U \frac{\partial^2 U}{\partial X \partial Y} + V \frac{\partial^2 U}{\partial Y^2} = - \bar{U} \bar{V} - \frac{1}{\rho} \left(1 - R_f \right) + \frac{1}{\rho} \left(\left(\frac{\partial U}{\partial X} + V \right) \frac{\partial^2 U}{\partial Y^2} \right)$$

$$+ \frac{1}{\rho} \left(\left(\frac{\partial U}{\partial X} + V \right) \frac{\partial^2 U}{\partial Y^2} \right) - \epsilon - 2V \left(\frac{\partial U}{\partial Y} \right)^2 \quad (4)$$

$$\frac{\partial^2 V}{\partial X^2} + U \frac{\partial^2 V}{\partial X \partial Y} + V \frac{\partial^2 V}{\partial Y^2} = C_{E2} \frac{\partial}{\partial Y} \left(D_{H2} \left(\frac{\partial U}{\partial Y} \right)^2 - C_{E2} \frac{\partial^2 V}{\partial Y^2} + \frac{1}{\rho} \left(\left(\frac{\partial U}{\partial X} + V \right) \frac{\partial^2 V}{\partial Y^2} \right) \right) \quad (5)$$

$$+ \frac{1}{\rho} \left(\left(\frac{\partial U}{\partial X} + V \right) \frac{\partial^2 V}{\partial Y^2} \right) + 2V D_{H2} \left(\frac{\partial U}{\partial Y} \right)^2 - \frac{C_{E2}}{2} \frac{\partial}{\partial Y} \left(D_{H2} \frac{\partial^2 V}{\partial Y^2} \right) \quad (6)$$

$$C = T, \quad - \bar{U} \bar{V} = f_{\infty} B \frac{\bar{U}^2 + \bar{V}^2}{2} \quad (7) \quad \frac{\bar{V}^2}{\bar{U}^2} = 0.94 + 0.41 \frac{R_f}{1 - R_f} \quad (8)$$

$$f_{\infty} = \exp \left(- \frac{2.5}{1 + R_f / 80} \right) \quad (9) \quad C_{E2} = C_{E20} \left(1.0 - 0.3 \exp(-Re_f^{1/2}) \right) \quad (10) \quad Re_f = \frac{\bar{U} \bar{L}}{V} \quad (11)$$

定数の値は、C_{H2} = 0.09, C_{E1} = 1.44, C_{E20} = 1.92, O_R = 1.0, O_E = 1.3 を用いた。数値解析を行ふ際の壁面境界条件の取扱いは、Re_fが十分大きい領域で取扱い、式標準を用いた。次に示す wall function 法で、壁面近傍の $y = \delta = \frac{\epsilon}{2}$ での $k = k_b$, $\epsilon = \epsilon_b$ を与える。

$$\frac{U_b}{k_b} = \frac{1}{k_b} \ln \left(\frac{U_b \delta}{\nu} \right) + A_s \quad (12) \quad A_s = 5.5, \quad \frac{k_b}{C_{E2} \delta} = \frac{1}{\sqrt{C_{E2}}} \quad (13) \quad \frac{\epsilon_b \delta}{k_b^2} = \frac{1}{k_b} \quad (14)$$

開水路流れて Jones-Launder モデルによる ϵ の鉛直分布を wall function 法とよぶ(Fig.2(a), (b)) によると、乱流域と著しく ϵ の程度で壁面から離れた位置 ($10^4 \delta / \nu > 10$) での方法は当てはまることがわかる。ただし、Re_f = $\frac{\bar{U} \bar{L}}{V}$ の基準値(本研究では 11.6)以下では、wall function 法は水理学的意義を失う。次に Re_f が低い領域を考慮した E 王子モデルでは、Re_f > 11.6 の場合標準を用いて同様に ϵ が計算され、Re_f < 11.6 の場合、壁面せん断応力 τ_b を判別式より求めた $\tau_b = \nu \frac{\partial U}{\partial Y}$ とし、また $\epsilon = 0$ とする。よって Re_f が低い領域を考慮した場合、但し、壁面近傍で格子を用いる程度遙かに少ない。但し、Re_f の低い領域を考慮した E 王子モデルでは、

Fig. 2(a)

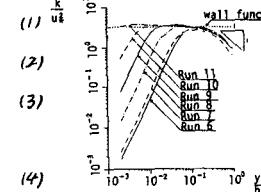
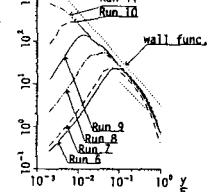


Fig. 2(b)



Yoshiaki IWASA, Takashi HISODA, Kuninobu ITO and Shinichi SAKAI

3. 数値解析結果の考察；基礎式をコントロール・スケーリング y/b_0 により、コントロール・サーエースで積分した後、離散化を行った。初期条件は $k_0/U_0^2 = 1.0 \times 10^{-2}$, $\epsilon_{0b}/U_0^3 = 1.0 \times 10^{-3}$

とし、境界条件は噴出口流量 Q_0 を一定、下流端で $U = 0$, $\frac{\partial U}{\partial x}, \frac{\partial \epsilon}{\partial x} = 0$ とした。壁面に関する下記述の手順を用いた。

Run 1 は RANS の低 Reynolds 数層流モデル、Run 2 は標準 E 方程式によるもの。Run 1, 2 の U の鉛直分布を Fig. 3, k , ϵ , D_{my} の鉛直分布を Fig. 4 に示す。

U の分布は、 y/b_0 が大きくなるにつれて、一度最大値を取った後減少する。これは wall jet の特性を再現したもの。また、 ϵ は一度急激に減少 ($\frac{d\epsilon}{dy} = 0$) 付近で極小値を取り、その後、 ϵ の方程式の生成項の効果のために ϵ は再び極大値を取り減少する。底面付近の R_{st} が低いと思われる領域の影響で十分考慮する必要あり。

Run 1, 2 の底面より上方 4 层を 8 层に細分して計算したものが Run 3, 4 である。 U の鉛直分布を Fig. 5, k , ϵ , D_{my} の鉛直分布を Fig. 6 に示す。 U は Run 1 より Run 3, 4 で特徴を表わす。Run 1, 2 よりも wall jet の特性を表わす。また、 ϵ は Run 1 より Run 3, 4 で極大値を取る位置が、下層の極大値が底層での ϵ の挙動を表す。上層の極大値は Run 1 と同じ理由によると予測される。

Run 1~4 の流速の鉛直分布は、自己保存領域の相似曲線を表す実験式 $U/U_m = 1.48 \gamma^{1/2} / (1 - \text{erf}(0.68 \gamma))$ (15) と Fig. 7 に示す。Run 4 以外は適合しないものと考へられる。下界付近、Run 4 は wall function 法が適用領域外であるため、壁面境界条件が適正に評価されていないものと思われる。

4. 結論；wall jet の数値解析を行った際、壁面境界条件 $Re_x = \frac{U_x(x/b_0)}{V}$ の値により wall function 法が適用可能の場合と、適用不可能な場合に分けることによって wall jet の挙動を再現できた。

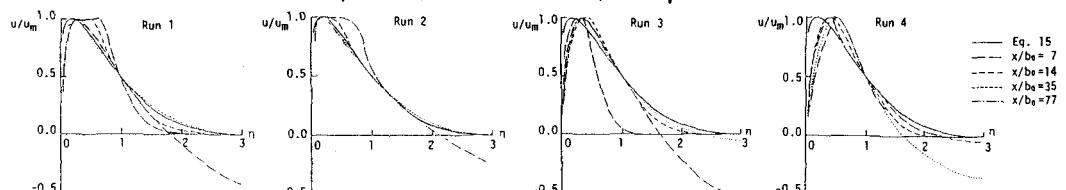


Fig. 7 U の鉛直分布（実験式との比較；Run 1~4）

参考文献 1) Jones and Launder; J. J. H. M. T., Vol. 15, 1972 2) 棚井・岩佐・細田；第39回年講, 1984
3) 伊藤・岩佐・細田；第41回年講, 1986 4) Rajaratnam; Turbulent jet, Elsevier, 1976

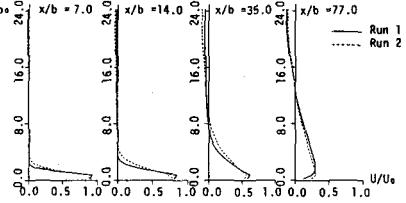


Fig. 3 U の鉛直分布 (Run 1, 2)

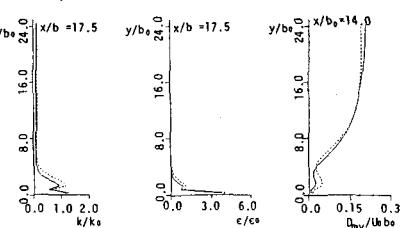


Fig. 4 k , ϵ , D_{my} の鉛直分布 (Run 1, 2)

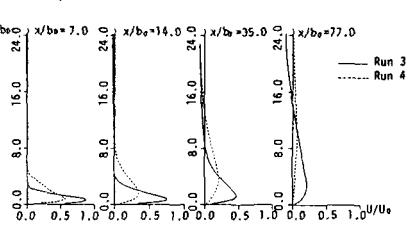


Fig. 5 U の鉛直分布 (Run 3, 4)

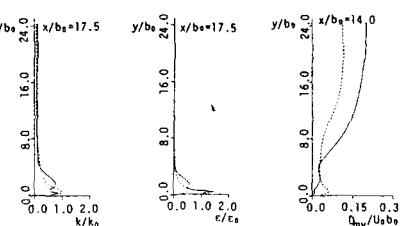


Fig. 6 k , ϵ , D_{my} の鉛直分布 (Run 3, 4)